Oshima Noh Theater Centennial Performance and the Value of the Theater

By Yukio Kamekawa Chairman, Hiroshima Kensho no Kai

translated by Nancy H. Ross

In eastern Hiroshima Prefecture lies the city of Fukuyama, with a population of 470,000. About 1 kilometer south of Fukuyama Station is the Kita School Oshima Noh Theater. Although it was destroyed in the firebombing of Fukuyama just before the end of World War II, the theater was rebuilt twice by Hisami Oshima, the third generation of the family's Noh performers. He was convinced that Noh could not be promoted in outlying regions without a Noh theater, no matter how small. Though it has received no support or recognition from the City of Fukuyama or Hiroshima Prefecture, the Oshima Noh Theater is a valuable asset to them as well as to the Kita School of Noh.

The theater, the only privately owned Noh theater, was originally built nearly 100 years ago in April 1914 by Hisatarō Oshima, the second generation of the family's Noh performers. A special performance marking the centennial of the theater's founding was held slightly early on Dec. 22. An audience of 400, including people from England as well as throughout Japan, packed the theater for the performance, the 236th in the theater's history.

The theater's regularly scheduled performances began in March 1958 with *Yoroboshi* featuring Hisami Oshima and *Funa Benkei* featuring Roppeita Kita, the 16th head of the Kita School. Because performers must be brought in from out of town, costs are comparatively high, and the performances almost certainly lose money. Nevertheless the theater has continued to put on four or five performances a year for more than 55 years, a record unmatched by any other privately staged series of performances in any school of Noh.

On November 3, the Chugoku Shimbun's Chugoku Cultural Award was at last awarded to Masanobu Oshima, the fourth generation of the family's performers, in recognition of his achievements over the years and the efforts of the entire Oshima family to promote Noh. And on December 7 it was announced that the Hosei University Noh Drama Prize in Memory of Kanze Hisao had been awarded to the Oshima Noh Theater. I was, quite frankly, pleased that the two prizes coincided with the centennial.

The centennial program featured performances of *Tokusa* with Masanobu Oshima, *Bōshibari* with Mansai Nomura, and *Shakkyō* with Akio Shiotsu and Teruhisa Oshima. Six *shimai* dances were also performed, making for an unusual program. The splendid cast of *Tokusa*, a rarely performed *hikyoku*, featured two living national treasures: Tadao Kamei on hip drum and Akiyo Tomoeda as the lead performer of the chorus.

Tokusa, one of the so-called *omonarai* plays that performers cannot undertake until reaching an appropriate age, is the story of a reunion between a father and his young son. The *monogurui* (crazed) old man dons his son's robe and dances. The sight of the weeping father created an atmosphere that differed from that of Noh plays featuring a reunion between a mother and child and was even more poignant. The combination of the dignified carriage and dancing of Masanobu, 71, and his adorable grandson, Iori, 5, in the role of the son made for a wonderful, affecting performance.

Accustomed to playing in the Noh theater, Iori sometimes begs to have the platform brought out so he can practice the lion dance from *Shakkyō*. And when he has time, he watches performances by his father and grandfather on DVD and imitates them. I sense promise in the sixth generation of the Oshima family.

The *han-noh* (abbreviated style of performance) featuring the lion dance from *Shakkyō* lasts less than 20 minutes, but it is a celebratory play that was perfectly suited to marking the theater's centennial. Akio Shiotsu, 69, was the white lion, while the red lion was performed by Teruhisa Oshima, 37, the fifth generation of Noh performers in the Oshima family. Teruhisa has studied under Mr. Shiotsu for 20 years, and the two were perfectly synchronized and displayed sharp footwork and movements in this dance of father and son lions. I was amazed when I saw Mr. Shiotsu, who was not the least bit winded, leap onto the platform in the *anza* (cross-legged) position. The sounds, *ma* (pauses) and *kakegoe* (calls) of the *tsuyu no hyōshi* and *ranjo* of the musicians (Shintaro Sugi on flute, Ichiro Kissaka on shoulder drum, Hirotada Kamei on hip drum and Mitsunori Maekawa on stick

drum) were truly superb. So, although the performance was short, it was very exciting.

I have been watching Noh performances for 50 years and have known the Oshima family for 20 years. I have also visited about 60 Noh theaters all over Japan, but I know of no other Noh theater that is as pleasant as the Oshima Noh Theater. During regular performances, Yasuko Oshima, Masanobu's wife, is attentive to patrons' needs, and the hospitality of the entire family is infused with cheerfulness and warmth. The facility also has several other features not found at other Noh theaters such as the distribution of viewing guides and explanations of the plays by Noh performers as well as no-host parties after each performance.

In September 2003 a portion of the building's first floor was remodeled and named Kashinokibana. Meals and tea are served there when regular performances are held. Noh costumes, dolls, musical instruments, books and photographs are on display, and visitors can learn more about Noh by watching a video. Children and foreign students can get a taste of Noh on the stage or in Kashinokibana, making this a learning center and cosmopolitan source of information on Noh that is rare even in Japan.

On another note, every year the Hiroshima City of the Future Foundation holds a Noh workshop for children. Although run under the auspices of the local government, which places importance on treating each school of Noh even-handedly, instruction at the workshop is always left up to sisters Kinue, Fumie and Norie Oshima, who are all excellent teachers. One reason is that no other school of Noh could provide *hakama*, kimonos and fans for 100 children as the Oshima family does.

For years people have been sounding the alarm about the decline in the number of practitioners of Noh, but the efforts of the Oshima Noh Theater in provincial Fukuyama to promote Noh outstrip those of the many Noh theaters in the metropolitan Tokyo and Osaka areas. I highly recommend you take in one of the theater's performances, which are well worth seeing, or attend one of their workshops.

Nohgaku Times, Volume 743, February 1, 2013

大島能楽堂の 市があっ、-と希山家から、美福市の福山、山田、大山、 たものの、三和日本と広観の「和田本と広観」の観光を読ん、 たちのの、三和日本と広観の「和田本と広観」の観光を読ん、 たちのの、三和日本に思えた。 たちのの、三和日本と広観の なための、三和日本と広観の たたちのの、三和日本と広観の なたいが、福田市や広島観の たいい、福田市や広島観です。 たちのの、三和日本広観での和志 たちのの、三和日本と広観の なたか、福田市や広島観の たちのの、三和日本広観での和志 たちのの、三和日本広観での和志 たちのの、三和日本など、 たちのの、三和日本など、 たちのの、三和日本など、 たちのの、三和日本などの たい、福田市や広島観の たい、福田市や広観でしている。 思えままた。 たい、福田市や広観でしている。 たちのの、三和日本ならの、三日日本観報 たちのの、三和日本などの たちのの、三日本間本ないが、福田市や広観で たちのの、三日本の世本なら たちのの、三日本の世本なら たちのの、三日本の世本などの たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本国教に一日 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちからの、三日本日本などの、 たちのの、三日本日本などの、 たちのの、二日本日本などの、 たちのの、二日本市本などの、 たちのの、二日本市かた」 たちのの、二日本市本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本ない、 た日本本などの、 た日本本ない、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本などの、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ないで、 た日本本ないか、 本国本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本ない、 た日本本本ない、 た日本本本ない、 本本本ない、 た日本本本ない、 本本本本本本で、 た一日、 本本本本本で、 た一日、 本本本本で、 た一日、 本本本本本本本で、 本本本本本で、 本本本本本本で、 本本本本本本本本本本
「石橋」塩津哲生・大島輝 の、それらの間に六つの段 の、それらの間に六つの段 なり、子がいったり合い、深らしい洗が子の推直乗を身にま とって難い、愛らしい洗の子方伊織 した、うかし、一番にと加る、 をしい六代目の予感がす る、「未賊」は、それ相応の 下水賊」は、それ相応の 「本賊」は、それ相応の 「本賊」は、それ相応の 「本賊」は、それ相応の に定義なり、一子の推直来を身にま とって難い、愛らしい洗の子方伊織 見なり、一子の指してある。移曲といわれ る、親子御」の実品にを起してくれと した。 夏行を出してくれた。 した、 一畳行を出してくれた。 した。 一畳行を出してくれた。 した。 一畳行を出してくれた。 した。 一畳行を出してくれた。 した。 一畳行を出してくれた。 した。 一畳行に逃びたり合い、この能楽は、 の気の温和る所作や舞 れば、弾子がつたり合い、この能を奏れて のなり、この能を見た。 しい、代目の予感がす る、 見たでおる。 が、この能を見た。 した。 一畳行に逃じたのたが、 この能を してくれた。 を しいた代目の予感がす る。 一畳行に逃じたりため、 にま たの にした。 を 見た。 たり、 に、 一畳行に逃じたのたり に、 ため たり、 たり たり、 たり たり、 たり、 たり たり、 たり たり、 たり たり、 たり たり たり、 たり たり、 たり たり、 たり たり たり、 たり たり たり たり、 たり たり たり たり たり たり たり、 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
たいに気持ちが高かった。 能楽鑑賞屋五十年の私 は、大島家空ほど気 持ちの良い舞台を訪れていいるが、大島能楽堂ほど気 持ちの良い舞台を加たしり、全国約 が行き届いていて気を訪れていいるが、大島能楽堂ほど気 持ちの良い舞台を他に知ら ない。行者をいいくつもある。それに、鑑 賞の手引き配布や能楽堂を訪れていいるが、作響木端」が一手年になり、全国約 が行き届いていていう配と見たた。 本がらである。それに、鑑 豊ながら学者でもの能能でした。 見ながら学者でも、定例能 いいくつきまで、楽 たいに気持ちが高かった。 とない、特徴がいくつもあ る。
「石橋・連獅子」塩津哲生、大島輝久(撮/池上贏油) のできないことだからである。全国でも 間楽に見留時間をしている。しかし、各 前は変わらが、広告常正、 本都定自えている。しかし、各 間催している。しかし、各 間催している。しかし、各 間に任せきらできるのは大 島豪だけ、他酒儀では貫似 のできないことだからである。 をとしている。しかし、各 たない。 うな力が正したからである。 をしていたな。 である。この福山とい うな力が正にあるく行都ににある。 たち部ににある。 たち部してある。 を 当をも思考えたけ、他酒様では 言似 のできないことだからである。 またりである。 のに またがたい。 この福山とい うな力が正にある。 しかし、各 たからであ る。 である。 のに まっている。 しかし、各 たかしてある。 を 当を に を を したい。 である。 の に まるで の に まるで の に を る。 (撮) (撮) (撮) (撮) () () () () () () () () () () () () ()